

泉鏡花の人物像に関する戯曲

『水すい向こう茶ちや碗わん』

作

武たけ石いし最も中なか

登場人物

泉 いずみ 鏡花 きょうか . . . 小説家

槇野 まきの 浄二 じょうじ . . . 時計職工・見習い

小村 こむら 雪岱 せつたい . . . 日本画家・鏡花の装幀家

泉 いずみ すず . . . 鏡花の妻

お洋 よう . . . 鏡花邸の女中

露子 ふきこ . . . 鏡花邸の近所の荒物屋の孫

久野 くの . . . 時計職工・槇野の兄弟子

清水 しみず . . . 時計職工・新人

時計店の客

大正9年。泉鏡花四十七歳の年。晩秋。

東京、麴町6番町の泉鏡花の邸宅。

舞台には書齋と茶の間の空間がある。

書齋は沢山のうさぎの置物と文机がある。文机の上には仕事の道具と、アルコールランプがある。

茶の間には、小さい仏壇、柱時計、長火鉢と卓袱台がある。

夕方

鏡花が、うさぎの置物に囲まれながら、原稿用紙に向かっている。

が、筆を持つ手が動かない。書けないのだ。時々うさぎの人形を抱いてうっとりとして、時間を潰している。

その様子を、女中のお洋が困り顔で伺っている。

すず（39）が茶の間でインゲンのはいったざるの前でへタを取っている。

すず お洋さん、先生はどう？

お洋 はい。まだ書かれておいでです。

お洋、茶の間に入って来てへタを取り始める。

すず ……え？今日は書けるのかい、あの人……？

お洋 ……はぁ……まぁ……そうですね……。

お洋、すずと目を合わせない。

すず、じっとお洋を見る。

お洋、困る。

お洋 ……すみません、嘘です。筆持って、こう固まったかと思ったら、ウサギ抱いて、ニヤニヤしてました。

すず （溜息をつく）……そんなことだと思った。……可哀想にねえ。

お洋 今度は長いですよね。

すず うん。どうもね、若い売れっ子先生達から、「古い」だとか、「化け物小説」だとかって陰で言われてるらしくってね。

鏡花、怖い顔で筆が進んでいる。と思いきや人の名前とバツ印を書いている。

お洋 そういうのって旦那さんみたいな方は、わかりますよね。感じるっていうか。すず そうなのよ……。おとついなんか寝言で「私の小説を馬鹿にするな！」って。お洋 うわあ、怖い。(ハツとして) お気の毒ですねぇ。すず ……物書きの女房ってこんなに気を揉むんだわね。お洋 おかみさん、大丈夫ですって、先生程のお人なんですから。すず (涙を拭いて) うん。雪岱さんも夕べ言ってたわね。周りがさり気なくしないと。お洋 任せてください！

間。

お洋 ……もうこんな時間だ。すず 先生、お腹空かないのかしらねえ。お洋 先、食べちゃいますか？すず あら、お洋さん空いてんでしょ。お洋 いやんだ。図星ですけど：固くなっちゃいますよ、羽二重団子。すず そうね、折角だからお団子を先食べちゃおう。お洋 はいっ！

二人みるみる内に卓袱台の上を、片付けてお茶を用意する。

「頂きます」「おいしい」など言ってお団子を食べる。

お洋 雪岱さんて、出来た方ですよねぇ。先生のお好きな物を、ちゃんと心得ていて。すず おや、団子に口説かれてるよ。お洋 そろそろ羊羹かな。すず あらまあ。お洋 お描きになる絵は素晴らしいし：先生の味方って感じでキツパリしてて。

すず もの静かだけでも、心ある方よね。そういうところ、先生と似てるんだわね。
お洋 そうですかあ？先生のは、ちよつと…じとつとしてるけど。
すず あら。あれで、可愛いところあるのよ。

鏡花、くしゃみをする。

お洋 (頬張りながら)へえ。あたしはまだ、大人のそうゆうの、わかんないです。
おかみさん、先生の分どうします？

すず お洋さん好きなら持つてくかい？

お洋 (お茶を飲みつつ)そうですかあ？そうですねえ。先生つてば、硬いのを召し上
がると、いつかみたいだね…：…んんっ。(むせる)

すず ほらあ、大丈夫かい。(背中をさする)

お洋 (むせながら)だって。

お洋、すずの背後を指差す。

すずが振り返ると、鏡花が恨めしそうに立っている。

すず んっ。(呑み込む)あなたも…：…召し上がる？

鏡花 硬いという噂だから遠慮するよ。

お洋 今、ご、ご飯にしますから。

雪岱(声)ごめんください。

お洋 あれれ、お客様。は、はあい、今。(奥へ下がる)

鏡花 うさぎが逃げたワ。

バツの悪そうなお洋に、鏡花とすず吹き出す。

鏡花、火鉢にあたりながら、煙管で一服始める。

雪岱、お洋に通され、茶の間に入って来る。

お洋 先生もこちらです。どうぞ。

雪岱 これはどうも、お揃いで。

鏡花 うん。冷えるねえ。

すず 雪岱さんすいませんね。新婚さんなのに、こう毎日陣中見舞いに来て貰ったんじや悪いこと……。

鏡花、大きく咳払い。

お洋 先生、雪岱さんにおみやを頂戴しました。

鏡花 いつも悪いよ、君。

お洋 (声を潜めているつもり) 先生、羊羹のようです。虎の字です。

一同爆笑。

すず 色々良かったわね、お洋さん。

お洋 はい。先生、すぐにお爛つけてきますよ。

鏡花 ああ、頼みますよ。

お洋とすず去る。

鏡花 一昨年に君がしてくれた『粧蝶集』の装幀ね、あれ随分と評判だね。殊に、見返しの露草をみんなが褒めるよ。あれは確か家の表に、咲いていたやつだったね。勿論、僕もとても気に入っているから、嬉しいよ。

雪岱 私の力ではありません。先生の作品がそうさせてくれるんですよ。

鏡花 いやあ、みんなの口に登るということは大した事なんだよ。

鏡花、煙管に紙のサックをつけようとするが取り落とす。

鏡花 ん？おととと……。サック……。サック……。紙サック。

雪岱 サック？いつものですよね……。っと、あった！

雪岱が拾って渡す。

鏡花 (受け取り) 今どこにあった？

雪岱 こっちの方です。

鏡花 君の足の方？

雪岱 足に付いては、無いです。

鏡花 心配。(紙サックをくしゃつと潰して捨てる)

雪岱 すいません。

鏡花 まだあるから、気にしなさんな。

雪岱 ……。

鏡花、雪岱を促し卓袱台につく。

卓袱台の上を睨むように眺める。

お洋が酒一式をお盆にのせて入って来る。

お洋 おまちどう様でした。

鏡花 お洋さんには悪いんだがな…。(あごで卓袱台を指す)

お洋 ……あつ。すみません、ただいま。

雪岱 私が持ちましよう。

お洋 すいません。(お盆を渡す)

鏡花、雪岱のお盆を持つ手の菌が気になる。

お洋 手桶もですね。

鏡花 おしぼりでいいから。

お洋と入れ違いに、さすが台拭きとおしぼりを持って入って来る。

すず、台を拭いたり、おしぼりを渡したりする。

念入りに手を拭く雪岱。

鏡花 『余りと言えば、何にもねえ。膳の上が野原じゃないか』

雪岱 『野原に酒がありやお花見じゃないか』

鏡花 『おこうこで沢山だ』

雪岱 『日本橋』ですね。

鏡花 ああ。懐かしいね。

雪岱 先生、また、『日本橋』みたいな恋情物、書いて下さいよ。

鏡花 そうねえ。

雪岱 読者は先生の鏡花節を待っているんですよ！ねっ先生！

鏡花 そうかしらねえ……。

酒を酌み交わす二人。

皿類を運ぶお洋とすず。

そして夜は更ける。

赤ら顔の鏡花、着物がはだけている。

雪岱は、うとうとしながら相槌を打つ。

すず、手酌でうまそうに呑んでいる。

三人共、ろれつが回らない。

鏡花 (ろれつが回らず) 『先生の本は雪岱先生の絵がきれいだからみんなが欲しがるんですよ』だってさ。どうせ、俺の作品なんて馬鹿にしてんだぜ……。

雪岱 してないですよって。実力が違うじゃないの鏡太郎ちゃんとは！

鏡花 ……だろう？書きゃあ良いってもんじゃあ、ありませんっ！

雪岱 そうだそうだ！

鏡花 あとね、大事なのは人柄！

雪岱 ん？……ん？……うん？人柄？

鏡花 やだなあ……呑んでる？人柄は大事でしょ？お茶がらは掃除に使うし。な、すず。

すず その通り！

鏡花 あら？何だっけ？

雪岱 人柄。

鏡花 あのさ、ここだけの話さ、この頃の作家ってちょっと、ほんのちよつと、変わってない？良いの？ああいうのが流行るの？……くそお……たあにいざあきいいい！

お前とは金輪際、鍋は食わんぞお！ねえ、俺って嫌われてんの？ねえ。

雪岱 みんな、嫉妬してンですよ。

鏡花 嬉しいっ。せつちゃんだけよ。この鏡太郎の肩、持ってくれるのは。さ飲んで。

雪岱 いや、今夜はこの辺で。家内が待ってるんでね。

鏡花 え？もう？もうちょっといいじゃないのさ。

雪岱 また近いうちに来ますんでね。

鏡花 近いうちって？いつ？

雪岱 ええ、そうですね……。

鏡花 ほらあ、出まかせだろう。一人にするなって。

雪岱 先生。(半べそ)

鏡花 ……。(すずに) 君は本当にうまそうに呑むなあ。

【二】

時計屋「井上」店内。

奥にある、閉じた硝子戸に赤いペンキで「井上時計修理」の文字。

逆さに見える。

その手前に、無地のカーテンが雑に閉まっている。

夕方。店は休み。暗い中に電気スタンドの明り。

舞台中央の机で修理をする榎野。榎野の目にはルーペ。机の上には、電気スタンド、アルコールランプ、ピンセット、エアブロワー、英語の辞書などがある。

榎野 今まさに壊れた掛け時計を分解中、ゼンマイで指を切る。

その様子を鏡花が硝子戸のカーテンの隙間からじとっと見ている。

榎野 痛えっ。

鏡花 どした？き、切ったのかい？

榎野、鏡花の気配を無視する。

鏡花 ちよつと、君。開けて。

榎野 うるせいなあ。

鏡花
ねえって。

槇野、無視をつづける。
鏡花、諦めない。戸を叩く。

鏡花
ねえ。君だよ君。ねえ。
槇野
ちっ。

槇野、ルーペをしたまま、カーテンをちらりと開けて。

槇野
なんだよ。

鏡花
大丈夫かい、指。切ったんだろ。

槇野
…：用がねえなら、帰えってくれ。（カーテンを閉める）

鏡花
なんで？ちよつと指…：。

槇野
ああ、しつけえな。（戸を開ける）

鏡花
時計を直して貰いたいんだ。

槇野
そうだろうな。だが今度にしてくれ。

鏡花
…：ああ、休みなのか

槇野
閉まってんだから、判りそうなもんだぜ。

鏡花
本当に休みなのか？

槇野
聞いてねえのか。休みだっうの。日曜だかな。

鏡花
でも君はいるじゃないか。

槇野
…：しつけえなあ。師匠が休みだ。俺は見習い。

鏡花
君は直せないのか。

槇野
そら、直せるにきまつてら。

鏡花
…：ちよつと、見てくれるだけでいいんだよ。

槇野
みんなそう言うんだ。それで帰った試しがねえよ。

鏡花
いや何、壊れているって訳じゃないんだ。（入ろうとする。）

槇野
（入れまいとして）じゃあなんだよ。

鏡花
少し、早まるだけなんだ。（尚も入ろうとする。）

槇野 (入れまいとして) 何言ってるんだよ。そういうのを、こちらら玄人は、故障ってるんだよ。

鏡花 そうかもしれないが。

槇野 ちきしょうめ。降ってきやがった。……ちっ、見るだけだぞ。

鏡花 ああ。見るだけで結構。

槇野 入んな。

鏡花 悪いねえ。

槇野 心にもねえことを……。

鏡花 ……君……歳は？

槇野 二十歳前だけど？

鏡花 私は四十七だ。

槇野 そりゃ良かった。平均寿命は延びてんだから長生きしねえとな。

鏡花 ああ。君は客商売の割に……どこの生まれだい。

槇野 ああ。口が悪いのは、生まれつき。谷中の育ちなもんでね。

鏡花 どうりでね。

鏡花、カーテンを無造作にめくって店の中に入る。

槇野 おう、おう。埃立てねえでくんな。静かに歩け。机にも寄らねえでくれ。

鏡花 ……ああ、わかった。

店の中は無数の時計の秒針の音などが低く聞こえる。

鏡花、店の中に入ると、たちまちぼうつとする。

次第に目が慣れて行く。

槇野 なんだよ、さっきまでの勢いはどうしたね。

鏡花 ……ああ、ここは、なんて魅力的なんだ。想像以上だよ。まるで人の時間が……人の運命がね……見えるようだよ。

槇野 は？

鏡花 まるで、交差点だ……人生の。

槇野 ただの時計屋だよ。

鏡花 君。それは違うぞ。

槇野 へ？

鏡花 そうさ、君だって、ただの、時計職人の見習いではない。

槇野 じゃあ何？。

鏡花 君は、時を司る三人の女神の使いなのだ。人の運命の微調整をしているんだ。
だれかれ、出来る事じゃない。誇りを持ちたまえ。

間。

槇野 おう。……ちよつと、何言ってるんだかわかんねえけど、あんた、面白れえな。

鏡花 それは良かった。

うっかり鏡花が触った机の上を、槇野エアードロワーで埃を飛ばす。
気まずい鏡花。

槇野 見せてみな……せつかちなヤツ。

鏡花 ああそうだった。

ごそごそと懐中時計を出し槇野に渡す。

牧野外していたルーペをつけてスタンドの明りをあてる。布で拭きながら。

槇野 どれどれっと（真剣な眼差しで蓋を開ける）

鏡花 な、壊れてないだろう。

槇野 ちっ、うるせえ。

鏡花、口をつぐむ。

槇野、険しい顔で耳につけて秒針の音を聞く。

自分の時計と時間を比べてみる。

槇野 あんたよく手、洗うか。

鏡花 じよ、常識の程度にな。

槇野 こりゃあ相当、洗うな。

鏡花 な、何でわかるんだ。

槇野 癖なんかは時計をみればな。

鏡花 へ、へえ、癖ねえ。

槇野 いいかい？この風防硝子、ちよつと、曇ってんだろ。

鏡花 ああ、時々こうなる。

槇野 時々だ？

鏡花 ああ、時々だ。

槇野 呆れるぜ。これはな、中に水が入ってんだ。

鏡花 入れない、入れない。

間。

槇野 何もわざと入れなくても、どうしてもこのねじ巻きのリュウズから入る。あんた

雨に濡らした様子もねえし、身体使って汗水流してって仕事じゃなさそうだ。自分で洗濯するって柄じゃない。そうなると、きれい好きか、しょんべんが近いからだ。

鏡花 ……しょんべんは近くない。

槇野 癖はしようがねえさ。湿った手で使わねえに限る。懐に入れっぱなしも良くない

んだぜ。物書き屋さんは。

鏡花 ……ん？何でわかった？

槇野 やっぱりそうか。指のたこ見ればな。……これ、今日は預かるよ。

鏡花 いいのかい。

槇野 ああ。丸一日こうして電気を当てて、水を飛ばすんだ。四、五日経ったら取りに来な。早まるのも直してみるよ。見習いだ、銭はいらねえ。

鏡花 それじゃあ悪いよ。

槇野 だから、合間にやらせて貰う。

鏡花 ……ありがたいよ。思い出の品なんだ。

槇野 そうだろうよ。

鏡花 ……私にも師匠がいてね。この先の青山に眠ってるんだ。先月の命日にも行ったんだがね、この頃、仕事や迷うことがあって……今日は私の生まれ日だね。相談がてら、師匠に、会いに行つたと言う訳さ。

槇野 それで、前から気になつていたこの店に、寄つてみたつてことかい。

鏡花 ああ、時計屋には、憧れがあるんだよ。

槇野 ……ん？ちよつと待てよ。今日、何日だい。

鏡花 今日は十一月の四日だよ。

槇野 驚いたな。俺も俺も。十一月四日が生まれた日だよ。

鏡花 えつ、そりゃ本当かい？

槇野 本当も本当。珍しいこともあるんだなあ。

鏡花 な、人生の交差点だろう。……邪魔したな。

槇野 そうだ……俺は槇野。木辺に真の方だ。あんた、名は？

鏡花 泉。……ウチは麴町の6番町、腹が減つたら何時でもおいで。

槇野 ああ。

鏡花去る。

槇野紙に「泉様」と書く。

【三】

数日後の鏡花の邸宅。

茶の間にすず、雪岱、お洋が蒸かした芋を食べている。

雪岱 では、それ以来先生は、すっかり時計屋通いをしているのですか？

すず ええ…。ちよつとおかしな話でしょう？

雪岱 先生の懐中時計は直つたのですよね。

すず ええ、とつくに。

お洋 それはそれは腕に間違いはありませんよ。まるで新品の様ですから。時間もこれまでのように早まらずに、ぴったりこんと、合う様になりましたつて。

雪岱 なるほど。それでこれまでお支度が早かつたのですね。

すず ええ。せっかちな先生には合つていたんですわ。

雪岱 ……ちょっと解せないのですが、先生は何しに時計屋へ？

お洋 今はあすこにあつた柱時計を直しに出してンです。先生がご自分で外して綺麗に埃なんかを拭いて。こう、風呂敷にぴちっと包みながら「人生の交差点」がどうかこうとかおっしゃって。

雪岱 人生の交差点……！（期待大）次回の作品ですかね？

すず まあ。（期待大）

お洋 そんな感じじゃなかったですよ。

間。

お洋 あ、今何時でしょうか。

雪岱 （懐中時計を出し）そろそろ五時です。

お洋 やっぱり。どうりでお芋が、ペロツと入るわけですわ。

間。

雪岱 ご心配ですよね。

うなづくすずとお洋。

お洋はつい小指（女）を雪岱に見せる。

すず お洋さんったら。……ありませんよ。

お洋 すいません。つい……。

間。

雪岱 あのお、私がその……。

すずとお洋、期待する。

雪岱 いや、私の時計を置いて行きましようか？

すずとお洋落胆。

すず それには及びません。

雪岱 でも……。

すず お洋さんの腹時計があれば。私ら女には時計なんて暫く無くたって、なんも心配なんて、いりませんよ。そんなことよりね、雪岱さん。大事な旦那様が、碌々あの部屋で お過ごしにならない事が、この私には寂しくて寂しくて。

雪岱 わかります。

お洋、手拭いをすずに渡す。すずに気づかれないように雪岱に小指を立てる。
ぼうつとしてしている雪岱に「だから、あなたが暫く旦那様の密偵となって、様子を探ってください」とジェスチャーで伝えるが、うまく伝わらない。

雪岱 私もこう言っちゃなんですが、世間で小村雪岱と言えば「あいつは鏡花の相棒どころか女房役よ」と言われてる男です。それが、内緒で訳のわからない時計屋通いと来ては、正直な処、面白くはありませんよ。ええ、奥さん私もね、妬いておりますよ。

お洋 じゃ、わかるでしょ？（もう一度ジェスチャーをする）

雪岱 ……？

すず ごめんなさいね、雪岱さん。ウチの先生が本を書かなけりゃ、絵が描けないんだから、お宅だって食べていけないってわかっているのに、先生ったら何に現を抜かしているんだか。

雪岱 私は、食べる為だけに、先生の装幀をしてるんじゃないやありませんよ。先生の作品が好きなんですよ。それと、先生を見てると構いたくなるって言うんでしょうかね。好きで、くっついてンですよ。

すず 雪岱さん。

雪岱 ですからね、私も気になって気になってしょうがないんでね……あ、良い事思いつきましたよ。

すず え？

雪岱 私が今度こっそり先生のあとつけてみましょう。どうです？

お洋 (呆れて) いいと思いますよ！

雪岱 良かったあ。

鏡花 (声) 帰ったよ。

一同、はっとする。

すず あら、お帰りだわ。(迎えに行く)

お洋 雪岱さんだけが頼りですからね。

雪岱 (首をかしげながら) 判りました。判りました。

お洋 肝心なのは、どうか本当の事(小指)はおかみさんにはこれ(内緒)で。

雪岱 は、はい。

鏡花が先になつてすずと入って来る。

すず茶の間から台所へ去る。

鏡花 何を、こそこそしているのかな。

雪岱 あ、先生お帰りなさい。

お洋 お帰んなさいまし。いえね、今日頂いた川越のお芋があんまりおいしいんで、内緒でまたお願いしていた訳なんです。すいません。(台所へ去る)

鏡花 ああ、悪いね。川越は君の郷なものね。

雪岱 あんなので喜んでもらえて。

鏡花 そうだ、明日あいつにも持ってくかな。

すず、お洋、聞き耳を立てている。

濡れ手拭い、酒、湯豆腐鍋が運ばれる。

湯豆腐を取り分ける。

鏡花、雪岱酒を酌み交わす。

雪岱 え、あいつというのは？

鏡花 うん……槇野と行ってね。面白い奴なんだ。
雪岱 今日もそちらへ？
鏡花 うん。
すず 明日もそちらへ？

お洋、熱い湯豆腐を鏡花の前に置く。

鏡花 ……うん、君も、まあ食べよう（湯豆腐を食べる）……熱いつ。
すず あらあら。気をつけないと。
雪岱 先生は、熱い湯豆腐がお好きなんですもんね。

鏡花、照れ隠しで、酒をぐいっと飲む。
雪岱、すず、お洋、顔を見合わせ、にんまりする。

鏡花 あ、今の君「湯豆腐」を腐る方ので言ったね。
雪岱 （すずに）言いました？言いませんよね「湯豆腐」だなんて。
鏡花 さて、どうかな。
雪岱 いいですよ。先生、明日からご自分の行動に気をつけて下さいよ。
鏡花 ん？何のこと？
雪岱 あ、いや。（酒を飲む）

お洋、雪岱を目で、たしなめる。
頭をかく雪岱。

【四】

夕暮れ時

青山・井上時計店内。

槇野と鏡花、打ち解けて話している。

硝子戸から、雪岱が覗いている。

鏡花、机の上の英語の辞書を手に取る。

鏡花 英語を学んでいるのかい。年季が入ってるじゃないか。

槇野 兄弟子のお下がりで。

鏡花 ほう。

槇野 時計の修理の教本は、中身がみんな横文字なんだよ。

鏡花 へえ。驚いた。

槇野 だろう。でも所詮は言葉なんだから、判って来るさ。

槇野、せっせと修理をする。

鏡花、仕事ぶりを楽しそうに見ている。

鏡花 そうだ君、蒸かした芋は好きかい？川越のだ、うまいよ。（芋を出す）

槇野 ああ、食ったなあ。お袋の塩の加減が丁度いいんだよな。

鏡花 そうかい。私は母の味は覚えていないよ。九つの時に亡くなった。

問。

槇野 そんな時からそんな風にしよげた顔してたのか。

鏡花 え？そんな顔してるのかい。

槇野 自分じゃ、見えねえか。

鏡花 （吹き出して）そうかもなあ。

鏡花、自分の顔をなげる。

顔を鏡に映そうとして、ふと硝子戸に目が行く。誰かと目が合う。

雪岱は慌てて顔を隠す。

鏡花 （外の人が気になる）お袋さんは達人なのかい。

槇野 ああ。お袋に、いい時計をあつらえてやりてえんだ。世話になったから作るのか。いいな。

槇野 今に、女も子供も、みんなが時計をする時代が来るぜ。

鏡花 素晴らしいな。

槇野 急いで腕、磨かねえとな。

間。

鏡花 喉が乾くな。

槇野 温度が一定だから。

鏡花 なるほどな。

槇野 今、お茶入れるよ。熱いやつな。

鏡花 悪いな。どうも、ぬるいのは信用できんのだ。

槇野 いいさ。慎重な位がいいんだぜ。

鏡花 そうだとも。

槇野、お茶を入れている。

急須には、紙のサックが付いている。

鏡花 これ……紙サック良いだろう？

槇野 ああ、ちょうどいいよ。恋女房のお手製だっけ？

鏡花 うん。本来は、否定すべきだろうがね。恋女房は恋女房だ。

槇野 ぬけぬけとまあ……。

鏡花 君は？

槇野 俺か？……まだ見習いの身分だからな。先生もあんまり細かい事言っつと、逃げられちまうぜ。

鏡花 ……そうなのかい？へえ、覚えておくよ。そうだ、君、芋も一緒にどうだい。うんいいね。

鏡花 な、折角だから、このアルコールランプであぶってみるかい、うまいんだぜ。だめだめ。店に芋の匂いがつくだろうよ、何が折角だよ。

鏡花 ……そんなら君だけ食べろよ。

槇野 あっ。あんたいつもそうやって食ってんだろ。

鏡花 ……うん……あのね、それと同じやつ持ってる。

槇野 ……アルコールランプ？なにを照れてんだよ。

鏡花 大人のこだわりが露見したから。
榎野 うるせいよ。ただの変わり者だろうが。

牧野熱そうに湯呑を渡す。芋をかじる。

鏡花 (ふうふうしながら飲む) 美味しいよ。

榎野 冷っこいけど、この芋うめえわ (鏡花に勧める)

鏡花 (手を振って) いらない、いらない。(手拭いを貸そうとする) 使うかい。

榎野 いや、じぶんので。(念入りに拭く)

鏡花 君もなかなかどうして……嫁の来てがないぞ。

榎野 だろうな……喉、湿ったかい？

鏡花 ああ、お陰でね。君、谷中と言っていたけど、あの辺の水はどうなんだい？

榎野 うん。随分と道も出来たりだからね。

鏡花 私が生まれた金沢つてところはね、水がとことん美味くてね……。君、金沢は？

榎野 いや、東京以外知らねえ。

鏡花 一度連れてってあげたいよ。金沢に。

榎野 いいなあ。旅かあ。……俺、見習い貸貯めるからさ。

鏡花 そんなのは気にするな……行くか？

榎野 ああ、連れてってくれよ。

鏡花 よし、行こう！

榎野 ……おう！男の二人旅。弥次喜多道中よ！

鏡花 いいねえ。弾むね。

店の硝子戸を叩く音。

雪岱である。

雪岱 (叩きながら) ごめんなさいよ。もし、時計屋さん、ちょっと。

榎野と鏡花、息を潜めている。

雪岱 あのお、こちらに泉鏡花先生は、おいでじゃないでしょうか？
鏡花 あの声は……雪岱君？
槇野 知り合いかい。
鏡花 ああ。
槇野 何でここに来るんだ。
鏡花 さあな。

雪岱、引き下がらない。

鏡花が渋々戸口に近づく。

鏡花 何？
雪岱 あーやっぱり先生いた。
鏡花 いますけど？
雪岱 何してんですか？
鏡花 それはこっちのせりふ。
雪岱 開けてくださいよ。
鏡花 さようなら（手を振る）
雪岱 そんなつれない事言わないでくださいよ。
鏡花 良いからもう帰んなさいよ。
雪岱 せっかく、羽二重団子買ってきたのに……
鏡花 えっ、そうなの？じゃいいか……
雪岱 あっ。（よそを指さす）
鏡花 えっ？（よそ見をする）

雪岱隙をついて店内に入る。

雪岱 お邪魔しますよ……っと。
鏡花 おいおい君……

静かに秒針の音が聞こえる。

槇野の姿はない。

鏡花 あれ……？あれ？（辺りを探す）

鏡花の呼吸が、段々と荒くなつて来る。

雪岱 先生。

鏡花 （興奮気味に）槇野君は？

雪岱 先生、落ち着いて下さい。

鏡花 ……槇野君。

気絶する鏡花。

駆け寄る雪岱。

雪岱 先生！鏡花先生！

【五】

後日。

鏡花の邸宅。茶の間。

布団に横になつてゐる鏡花。

すずが心配そうに傍についてゐる。

雪岱が入つて来る。

後からお洋が入つて来る。

雪岱 先生はいかがです？

すず ええ、だいぶ落ち着きました。

鏡花 すまなかつたなあ。

雪岱 とんでもない。でも、僕こそ心臓が止まりそうでしたよ。

お洋 先生、紅葉先生のお好きだったとかの最中ですよ……雪岱さんが。
鏡花 えっ？本当かい。（体を起こす）それは寝ているなんて無礼だ。

すず あなた、こんな時は、紅葉先生もお許しになりますよ。

雪岱 これはまずったなあ。

お洋 (鏡花に) 仏さまに供えますよ。おひとつ召し上がりますね。

鏡花 ああ。先生とご一緒に頂こう。

布団の上に正座をして、手を合わせてから最中を食べる。

お洋 やすず、お茶を運んで来たり、鏡花に羽織を掛けたりする。

すず あなた、良かったですね。

鏡花 うん。

すず ……でも、何してらしたんですか？時計屋さんなんかで…。

鏡花 時計屋なんかって…：お前。

雪岱 まあまあ。奥さんは先生を心配してるんですよ。

鏡花 ……

すず まだ隠しごとを、なさるんですね。

鏡花 別に、お前に隠し事などしておらん。

すず 嘘！（拗ねる）

鏡花 よさないか。みっともないぞ。

すず みっともなくして何が悪いんですよ！

鏡花 うるさい！

鏡花 ふて寝をする。

雪岱 奥さん。

すず 何なら雪岱さんも笑って下さいな。大事な亭主が、ウチがおろそかになるほど

何かに入れ込んで…。根がまじめで、まっつぐな亭主程、気持ちいい位に一途なも
んですよ。一度沼にはまったら、あつと言う間に腰までつかちまうんです。…：そん

な事、この私が正気で見えいられるとお思いですか！

鏡花 ……

雪岱 ……

お洋 ……おかみさん……
すず これはね、亭主に惚れてるって証ですよ！ただの居直りなんかと一緒にしないで
頂戴よ！

間。

鏡花 馬鹿……。

布団を被って男泣き。

雪岱とお洋もつられてほろりとなる
間。

お洋、仏壇にむかって手を合わせる。

お洋 紅葉先生のお陰です。（供えた最中を手に取る）

すず、雪岱に最中を渡す。

めそめそしている鏡花にも最中を渡す。

お洋 最中頂きましょうよ。お茶入れ直します。（去る）

鏡花 ああ。（起き上がる）

鏡花最中を袂たもとに収めながら火鉢に当たる。遠くを見る。

すず 煙草？まだ、身体に障りますよ？

鏡花 ……もう良いだろう。

煙管にたばこを詰めて火をつける。

美味しそうにくわえる。遠くを見ながらも、指は紙サックをいじる。

鏡花 『横頬よこぞっほを撲くいはしたが……。』

「……何でしたっけ？」

雪岱 ……まだだよ。次の。

「……まだだよ。次の。」

「……まだだよ。次の。」

「……まだだよ。次の。」

鏡花 なあ、すず。紅葉先生が見たら「そら見たことか」と言われるな。

すず もう、堪忍してくださいよ。

お洋 お二人……反対されたつきりでしたっけ？

すず お洋さんってば。

雪岱 でも、とっくにお認めだと思えますけどね。

お洋 ええ。

すず もうったら。（仏壇のりんを景気よく鳴らし、手を合わせる）お洋さん……。

お洋 はい。

すず 先生も今夜は召し上がるだろうから、お魚とあさりなんか買って来ておくれよ。

「……まだだよ。次の。」

お洋 はい。いただきます。

鏡花 お洋さん、ちょっと待ってられないかい。

お洋 はい？

鏡花 雪岱くんやお洋さんにも聞いてもらいたい話があるんだよ。

すず なんです？改まって。

鏡花 うん。

鏡花　まあ、聞いてくれ。すず……青山の時計屋のことだ。

すず　……。

雪岱　その事なら僕も……。

鏡花　ちよつと、聞いてくれ。さっきは意固地になって悪かった。みんなに謝る。

雪岱　先生。

鏡花　なに、たわいのない話なのだ。十月末の紅葉先生の命日には、すずと二人で墓参りをしたな。

すず　ええ。寒い日でした。あなた、風邪っぴきになって伏せましたね。

鏡花　……本当は風邪ではなかった。頭の中の小説の構想に迷いがあって……。

いや、それも嘘だな。自分でも解らないが……怖くなったんだよ……人が。これからも、怒涛の如く輩出されていく小説家達が……。私には恐怖でしかないのだ。おかしいよ。

滑稽だろう。私は元来、弱虫だからなあ。

すず　あなた。

雪岱　私に何か出来ることはありませんか。

間。

鏡花　ありがとう。今はもう大丈夫だ。……あの日は消えない不安を引きづって、私の

生まれた日だしね。ひとりで先生の墓前に参った。私は先生に『寂しい』と泣いてきた。

泣いて泣いて泣いてきた……。笑うかい？いいよ。長くなったがこっからなんだ。帰り、

青山通りを赤坂に向かって歩いていったんだ。ふつと時計屋の文字が見えた。前から、きになってはいたが、時計屋というのはどうも入りにくい。覗いてみると若いのがひとり、

背中を丸めて仕事してるのが見えた。すると、その男が指を切ったのが見えたんだ。な

んだか、胸の辺りがざわついて、こう、しつこく店の戸を叩いてた。休みの日にこっそ

りと腕を磨いてんのに奴さんは御冠さ。下町の育ちだからね江戸弁で、はなっから喧嘩

腰だよ。ところがね、奴さんの振る舞いを見てるとね、(クスリと思ひ出し笑い)私に負

けず劣らずの神経質な男なんだよ。まあ、向こうのは職業のせいだろうけどね。それと

その日が、私の生まれた日だと言うと、自分もそうだと言うじゃないか。わたしはね、

ああ、これは紅葉先生からの贈り物だと思ったね。弟子に寂しいと泣きつかれて困ったんだよ。

お洋　だからってなんだって日を置かないでそんなところに。

鏡花　槇野君は見習いの身だ。腕を磨くには、修理の数だ。ところが兄弟子もいるものだから中々全部はやらせて貰えない。そこで銭は要らないから壊れた時計を持って来て欲しいと頼まれたという訳だよ。

すず　それにしちゃあ、目の色が違ってましたよ。

間。

鏡花　自分では判らないね。ああいうのを、波長が合うというのかもしれん。恋等とは違う。もう一人の自分と居るような心地だ。隠すつもりはなかった。元の自分に戻ったらみんなに紹介するつもりだったんだよ。

雪岱　畑の違う友人は慰めになりますよね……本当に友人ならば。

鏡花　ん？まあいい。君、良かったら明日辺りに一緒にどうだい？

雪岱　私もそう思っていました。

すず　折角ですから、ここへお連れしたら？

鏡花　もし壊れた時計があるんなら見てもらってくれよ。

雪岱　ああ、遅れるやつならあるんですけどね……。

【七】

井上時計店の店内。硝子戸とカーテンは開いている。

これまでの雰囲気と違い明るく活気が感じられる。

机で修理をしている修理工の久野。

接客をしている修理工の清水。

そこへ鏡花と雪岱が来店する。

清水　気を付けてお帰りください。

客　思い出の品なの。どうもお世話様。(去る)

清水　ありがとうございます。(見送る)

鏡花　あの一。

清水　はい、いらっしやいませ。

鏡花 今日は、榎野さんはお休みかな？

清水 榎野ですか？……少しお待ちください。（久野に）先輩。

久野 （椅子から立ち上がり）ああ、こないだ、ここで倒れた方……ですね。

鏡花 あ、その節はお世話になりました。

雪岱 先生これ（菓子折りを渡す）

鏡花 うん。つまらないものですが、皆さんで。

久野 すみません。（受け取る）それで、榎野ですね。それがですね……本当に牧野に御用で間違いないのですよね。

鏡花 ええ、榎野君が留守なら、仕方が無い。少し前に預けた柱時計が直っているならそれ貰います。

久野 柱時計！清水君わかる？（清水、時計を持って来る。札を見て）……泉様。

鏡花 そうそう、それです。

久野 壊れていたんですよね？

鏡花 ああ、ねじを巻いても動かなくなっていました。

久野 なるほど。

雪岱 さつきから、歯切れが悪いですなあ。何か事情が？

久野 申し訳ありません。実はうちの榎野は5年前の夏、海で亡くなったんです。

鏡花 ならば、その榎野さんとは人違いですよ。

久野 （首を横に振る）他には牧野と言う職人は雇われていないはずですよ。

鏡花 だって、十一月四日が誕生日って……三日前にもこの店で……。

雪岱 先生、顔色が……。

久野 （清水に）その写真持って来て。

清水 はい。（前掛けで拭きながら渡す）

久野 この左端の人じゃないですか？（四、五人の写真）

間。

写真立てをひったくる鏡花。

目を疑う。

うなづく鏡花。

鏡花 ……か、彼だよ。

雪岱 先生、間違いないんですか！よく見て下さい。

鏡花 うん……わ、私にお茶を入れてくれた、ま、榎野君だよ。

久野 ……うちに居た榎野です。榎野浄二。浄めるに二。

鏡花 浄二。

久野 ええ。生まれてすぐ、谷中のお寺に拾われたんだそうです。ここでは私の弟、弟子でした。五年前お盆に海なんか行くもんじゃないっていうのに、若い奴らで出かけて行ったんですよ。……それっきりでした。

鏡花、膝から崩れる。

支える雪岱。

雪岱 先生、失礼しましょう。

鏡花 時計を……時計を貰わないと……いくらだね？

久野 お代は結構です。またいつでもいらしてください。(時計を渡す)

鏡花 また榎野君に会えるならね……。じゃあ。

久野 ……あ、あの……。

鏡花 はい？

久野 あいつ……その……今……元気なんですか？

鏡花 ……ええ。まぶしい位でしたよ。

久野 (涙をこらえて) そうでしょうね。

頭を下げ、ゆっくりと二人去る。

久野、清水が見送る。

鏡花たちが見えなくなると、清水が溜息をつく。

清水 本当に偉い先生なんですか？

久野 ……天才小説家と天才画家だよ。

清水 天才って、人が見えないものが見えるんですね。

久野 そうかあ。俺じゃ駄目か……会いたいのになあ。

客が来る。

清水 いらっしやいませ。

久野、写真立てをもう一度綺麗に拭いて、壁に掛ける。

【八】

その日の夜。鏡花邸の茶の間。すずと二人。

踏み台に乗って鏡花が柱時計を掛けて、ねじを巻いている。

その様子を慈しむ様に見守るすず。

鏡花 よしっと。

すず ……いい音色ですねえ。

鏡花 ああ。(涙を隠して鼻をかむ)

火鉢に当たる鏡花。

すず、袂で目頭をおさえる。仏壇に手を合わせる。

すず うちの先生がお世話になりました。

すつと、槇野が入って来る。

槇野 こっちこそすつかり世話になったな、先生。

鏡花 き、君……。来てくれたのかい。

槇野 ああ……。良いうちだな……。(時計の曲がり直して) 良いだろ。

鏡花 うん、さすがだよ。ありがとう。

槇野 おう。……。あつ。(すずを指差して) あれだ、恋女房。

鏡花 おい、大人をからかうなよ。(嬉しそう)

すず ん？

鏡花 あ……。いや。

すずは槇野に気づいていない。お茶の支度を二つする。
槇野、すずの目の前まで行きからかう。
鏡花吹き出す。

すず
なあに？おかしな人。

槇野と鏡花、声を殺して笑う。
すず、湯呑みを鏡花と槇野の前に置く。

鏡花
すず、お前見えるのか？
すず
いいえ。私、向こうに行ってますから、どうぞごゆっくり。（去る）

鏡花、啞然と見送る。
お茶を飲む。

鏡花
なっ、ゆっくりして行けるんだろ。

槇野
……俺も色々となあ。

鏡花
仕事かい？

槇野
いや。

鏡花
じゃ良いだろ。折角だ、一杯つけようか。

槇野
先生よ。

鏡花
なに、遠慮はいらんよ。修理代の代わりに……

槇野
なあ、先生って！

鏡花
ん？

槇野
ありがとな、先生。

鏡花
槇野君？

槇野
……今夜でさよならだ。

鏡花
……どうして？

槇野
どうしても。

鏡花
……私は構わないんだよ……その……君が……。

槇野 この世のものでないって。

鏡花 ……。

槇野 俺も知らなかった……。

鏡花 ……驚いただろう……な。

槇野 ああ。

鏡花 でも構わないじゃないか……このまま友達でいよう。

槇野 駄目なんだよ。

鏡花 なんで？駄目なことがあるかい。いいかい、私が君を必要としているんだ。君が、

生きた人だろうが、あの世の人だろうが、私には何にも障害になんかにならないんだ。

槇野 それがもう、変だろが！

鏡花 ……頼むよ。まだ、聞いてほしいことが沢山あるんだ。ほら、金沢にも行こう。

時計屋は休み放題、自動車賃なんか一人分でいいじゃないか！

槇野 ああ、行きたいさ。どうせなら自動車賃払って行きたかったさ！先生とあんぱん食

ったり、団子食ったりしながらさ、ぴかぴかの鞆持って行きたかったさ！

鏡花 なら、いいじゃないか。今から行こう。なっ。

槇野 駄目だって言ったら駄目だ。しつこいぞ！

鏡花、槇野にむしゃぶりついて。

鏡花 じゃあ、私が……私があの世界に行けば会えるのかい？

槇野 おい……。

鏡花 そうだね？そんなんだね！じゃそうしようよ。私はね、別にもうこの世に未練な
んかは無いんだよ。生きていたって生き恥晒すくらいなら、いっそ、君にあの世に連れ
てって貰う方が、すつきりするよ。な、そうしてくれよ！

槇野 おい……先生……おいて、そんなんじゃないつまでも生まれ帰れねえんだよ！

無理やり鏡花を突き放す。

槇野 ……俺な、成仏してえんだよ。

鏡花 成仏……？

槇野 そうだよ。俺、本当に先生と金沢に行きたいんだぜ。先生とはよ、おかしなところか似てたりよ。悪態ついてもお互い、へっちゃらでな。……師匠や育ての親なんかじゃなくてさ、本当の親ってこんな風なのかなって……よ。

鏡花 だったら槇野君……。

槇野 このままじゃあ、どうにもならねえんだよ。だからさ、俺が成仏して、先生も命をを全うして、生まれ変わったら、今度こそ切符買って、金沢連れてってくれよ。なっ。

間。

鏡花 ……そうだな……その方が楽しそうだな。

間。

槇野 うん。写真を撮ろうな。

鏡花 ……うん。撮ろう。

槇野 今度は水が飲める腹で生まれなくちゃだぜ。

鏡花 ああ、そのつもりだ。

槇野 そうだ、これ一つ貰ってくぜ。

煙草盆の上の紙サックを貰う。

鏡花 良いけど、何で。

槇野 今度会う時の目印だよ。あ、時計も大切にしてくれよ。もし壊れたら、おれの店の久野さんっていうんだけど、あの人に持って行きな。腕がいいから。

鏡花 わかった。

槇野 なあ、俺のこと忘れないでくれよ。

鏡花 馬鹿。忘れるもんか。

槇野、人生で最高の笑顔。

槇野 ……じゃな。

鏡花 ……ああ……またな。

槇野去り際にもう一度鏡花を見る。

鏡花 槇野君……待っててくれよ！

【九】

後日・鏡花邸の茶の間と書斎。

鏡花が踏み台に上がって、時計のねじを巻いている。巻き終わるといそいそと書斎の小さな花瓶と水向茶碗を取りに行く。

すずが仏壇の掃除をしている処にお洋が山茶花の枝を抱えてはいつてくる。

お洋 戻りました。

すず ご苦労様。まあ、見事な山茶花だこと。

お洋 今年は寒いから出来がいいんですって。

すず そうなの？……あなた見て。

鏡花 (足を止めて) うん。……喜ぶなあ。(花を受け取り台所へ去る)
すず ……。

すずとお洋、顔を見合わせる。

お洋 (台所に向かって) 先生、水が冷たいんで私がやりますか。

鏡花 (声) いいんだ。

すず ……。
鏡花 これは、私がやりたいんだ。ありがとう。(再び茶の間に顔を出し、書斎へ去る)

鏡花、書斎の机の上に花瓶と水向け茶碗を並べる。

花瓶の雫を拭いたりしながら。

鏡花 ……綺麗だろう。寒くたって良い事があるんだなあ……あの世の人にとって供えた花は身に纏う着物なんだってね。『だから棘があっちゃいけません』って……わかるかい？お洋さんだよ。明るい着物がお前さんに合うよ。

茶の間で鏡花の様子を伺っていたはずとお洋。

雪岱が静かに入って来る。

すず （書齋に向かって）あなた、雪岱さんが見えですよ。

鏡花 うん。

雪岱 （書齋に向かって）先生、朝飯まだでしょう。あんぱん買ってきましたよ。

鏡花 ……良いね。こっちにお入りよ。

雪岱 はい。

お洋が、おしぼりを。持たせる。

雪岱書齋に入る。隅に座る。

雪岱 これは、艶やかですね。

鏡花 うん。

雪岱 山茶花ですかね。

鏡花 うん。

雪岱 ぐい呑みとは粋ですね。

鏡花 安物の九谷だよ。

間。

雪岱 ……あんぱん食べましょうよ。

鏡花 そうね、頂こうか。

火鉢に向かい合う。おしぼりで手を拭く。

鏡花 うん。君も炙るかい？
雪岱 ……
鏡花 うまいよ。どれ。

二人、火鉢に当たりながらパンを炙る。

鏡花 どう？
雪岱 温まると旨そうですね。
鏡花 もう少し焼き目が付いた方が良いんだよ。
雪岱 熱っ…もう良いかな（一口食べる）…うん。
鏡花 旨い？

炙り続ける鏡花と熱そうに食べる雪岱。

雪岱 あんこが…熱いけど旨いな。
鏡花 芋、君に貰ったね。あれ榎野君もうまいって…炙ればよかったよ。
雪岱 ……
鏡花 こうしてると、色んな事を忘れられるよ。
雪岱 先生…
鏡花 そろそろいいかな…君、頂きますよ。
雪岱 ええ。どうぞ。

黙々と食べる鏡花。

鏡花 君、早くから出掛けたんだろ。気が紛れる様に…礼を言うよ。
雪岱 そんな、ほんのついでがあったままでの事ですから。
鏡花 （首を振って）…君といると穏やかでいられるよ。気を遣わせるね。
雪岱 （首を振る）

鏡花指で挟んでいるところ以外を食べる。指で挟んでいたところは紙に包ん

で捨てる。

鏡花 おかしいだろ。

雪岱 慣れましたよ。それにもっと衛生に慎重な方が本当は良いのだろうなあ。

鏡花 どうも目に見えない菌が気になる。

雪岱 先見の明ですよ。

鏡花 だとしたら、瓢箪から駒だな。これから日本も変わっていくよ。他国との交流が盛んになれば様式も変わる。習慣を変えるのは容易ではないだろうね。

問。

雪岱 変わる一方なんでしょうか。

鏡花 さてねえ。でもいつの時代も、人と人の繋がりがや絆なんては変わらないんじゃないかね。……いや、繋がりが希薄になってはいけないよねえ。

雪岱 そうですよ。だからこそ戦争なんて起きてはなりません。

鏡花 その通りだ。もつと、そういう事を主張した作品を書くべきだろうけどね。

問。

鏡花 君、以前私に『日本橋』のような作品を書いてほしいと言っていたね。

雪岱 ええ、人情噺。

鏡花 つまり化け物ものじゃなくて……。

雪岱 ええ、まあ。

鏡花 ねえ、雪岱君。君正直に答えてほしいんだが、私はこの文学界で、どうだろう。まだ必要とされていると思うかい……？

雪岱 先生、何言っているんですか！ 当たり前ですよ！

鏡花 いや、これまでの愚痴やぼやきで言ってるんじゃないんだよ？

雪岱 私も情や損得も抜きで、一人の装幀家として話しているんです！

問。

鏡花 わかった、信じるよ。もし、君の言う様にこの文学の世界にまだ私に微かにでも呼吸をする場所があるのならばね、私に一つ、考えができたんだ。聞いてくれるね。

雪岱 はい、是非。

鏡花 うん。まず、私の小説の世界は、柳田さんなんかの民俗学的なものじゃないよね。

同じ世界の様でいて、寧ろ真逆な処にいる幻想世界なんだ。

雪岱 お化けや妖怪の研究ではないですもんね？

鏡花 やっぱり私は……その世界でなら人情噺が書けると思うんだ。

雪岱 はい。

鏡花 うん。私はね、君やすずとの現世の付き合いがある一方、子供の時分に亡くした母や紅葉先生、祖母と……ずっとこの中で（胸）交流して来た。また今回は槇野君との唯一無二な付き合い……この事は大きかった。しかし、大小に関わらず、私にとってはどれも大切なご縁なんだよ。私はね、命の向こうに用があるのさ。私はそのことに改めて気づかされたんだ。人は死んだら終わりなんかじゃないんだ！

雪岱 ……先生独自の幻想の世界ですね。……魅力的です。力強いです！

鏡花 もう一度聞くが、私の文学を必要としてくれる人は存在するだろうか？

雪岱 何度も言いますよ、先生の作品は必要とされているんです。

鏡花 ……そうかい？……じゃ、命を削っても書くよ。となると、装幀は君に引き受けて貰わないと困るのだからね……。

雪岱 勿論です。その言葉を待っていました。

鏡花 良かった。ほっとしたよ。……色々心配をかけたがね。

雪岱 ……いえ、ちつとも。……早く読みたいなあ。

鏡花 ありがとう嬉しいよ。だがね実のところ、私は、今命尽きても満足ではあるんだ。

間。

雪岱 先生。温泉にでも行きませんか？

鏡花 ああ、いいだろうねえ。客の少ない山深い所なんていいねえ。

雪岱 いいですねえ。早速探してみましよう。

鏡花 ……いや。すまんが暫くは……。考えたいことあるんだ。

雪岱 ええ………良いんですよ先生。良いんです。

【十】

その後の鏡花邸。家の中は静かであり、鏡花が書齋で執筆中。

書齋に静かに入る幼女、ふき落子。うさぎの置物を手にする。

落子、小さなうさぎの置物が気に入ったらしく、袂に入れる。鏡花は全く気付いてない。

落子ひよいと。水向茶碗を手に取る。愛嬌がある。

鏡花、落子を二度見して腰を抜かす。

鏡花　うわあっ！……ええ？だ、誰だよ。

落子、鏡花を見て笑う。水向茶碗の水を飲もうとする。

鏡花　（取り上げて）こらこら。腹をこわすぞ。……どこの子だい？ちよつと、汚れるじゃないか……（その辺のおしぼりで拭く）人の家来るときは手足ぐらいはきれいにするもんだぞ。なんだ、濡れてんのか？ええ？参ったなあ……。待ってな。

鏡花、茶の間に向かって「おい誰か」と声を掛けるが応答がない。

仕方なく、奥から手拭いと古い襦袢を持って来る。

落子、楽しそう。

鏡花　（着替えさせる）男もんだけど、風邪ひくよか、良いからな。よしつと。

着替えると落子鏡花にきゅきゅと抱きつく。

戸惑う鏡花。咳払いをする。

鏡花　で、どこの子だい？

落子　落子ちゃんだよ。

鏡花　落子？知らんな。誰と来たんだ？

落子　（指を一本立てる）

鏡花 何しに来た？
落子 遊びに来た。
鏡花 ここは、仕事部屋なんだよ。子供が遊ぶ所なんかじゃないんだ。
落子 うさぎで遊ぶ。
鏡花 ……迷子か…。参ったなあ。

鏡花、部屋を出ようとする、その腕にくっついてくる落子。
悪い気はしない。

鏡花 どうした。心細いか。
落子 ……。
鏡花 おい、誰かいなか。すず…すず。

手をつないで家の中をぐるりぐるり捜す。

鏡花 ……居ないな。(ふと落子の口をみる) ん？落ちゃん、口を開けてごらん？
落子 あくん。
鏡花 あ、こら、うさぎが口に入ってるぞ。出しなさい。
落子 飴だよ。
鏡花 飴なんかじゃないよ。ほら出して。(手拭いに出させる)
落子 べえ。(と出す)
鏡花 何か食べるかい？
落子 (首を振る) ううん。うさぎと遊ぶ。(鏡花の着物の裾を掴む)
鏡花 はいはい。

落子に引っ張られて書齋に戻る。

落子 うさぎかわいい。…ねえ、おんぶする。
鏡花 うさぎを？えく。(面倒臭い)
落子 おんぶ！おんぶ！おんぶ！おんぶ！

鏡花 あくもう……わかった。わかったって。
路子 やったあ！やったあ！やったあ！
鏡花 かなわんなあ……えーっと、紐……紐っと。

すずの腰ひもを見つけて来る。
「じっとして」とか言いながら慣れない手でうさぎをおぶわせる。

路子 早くう。

鏡花 はいはい。おんぶですね。お嬢様。

路子 ふふふ……。

鏡花 はい出来た。

路子 かわいい？

鏡花 うん。路子お母さん。

路子 えへへ。

路子、後ろ手にうさぎをとんとんと叩いてあやす。

路子 お母ちゃん居ないけど上手？

鏡花 そうか居ないのか……上手だよ。

不意に路子が鏡花の背中におぶさって来る。

鏡花 どうした？

路子 ……先生……また遊ぼう。

鏡花 え……。

静かにりんのなる音。

茶の間で、すずとお洋の賑やかな声がする。事件があったらしい。

路子、袂から何かを取って、鏡花の手の中に握らせる。

鏡花、手の中の物（槇野が持って行った紙サック）を見る。はっと驚いているうちに、落子いなくなっている。動揺する。

鏡花 落ちゃん？……この、紙サック、どうしたんだい？落ちゃん？

鏡花、落子を捜して、腰ひもをズルズル引きずりながら茶の間に行く。
お洋が泣きながら話すのをすずも、もらい泣きしながら聞いている。

鏡花 （動揺しながら）このくらい、女の子が来ていたんだが知らないか？

すず 女の子？知りませんよ？私、ずっとウチに居ましたけど。

鏡花 え？居なかったぞ。

すず、腰ひもと鏡花を二度見してひったくる。

すず それよりも聞いて下さいよ。荒物屋のお孫さんが亡くなったんですってよ。お婆さんが目を離れた際にお堀に落ちちゃったって。

鏡花 ……え？

お洋 落ちゃん、おつかさんも病気で亡くして、お婆さんが娘に似てるって……。落ちゃんの事、いっつもおぶってましたよ。なっつくくてかわいい子なんですよ。どんなにか、冷たかったらうに。（再び泣く）

すず 不憫だねえ。

鏡花 （紙サックをみつめながら、独白）ああ、その子の事ならよく知っているよ……。落ちゃん、落ちゃんは、どうして私の処に来てくれたんだい？ど、どうして、この紙サックを持っていたんだい？これはね、これはね落ちゃん、私とあいつをつないでいる大切な紙サックなんだよ。誰に貰ったんだい？落ちゃん、君は誰なんだい……？

幕

参考文献

- 泉鏡花隨筆集 吉田昌志編 岩波文庫
泉鏡花全集 二十六卷 岩波書店
泉鏡花集成 十二卷 種村季弘編 ちくま文庫
鏡花短編集 川村二郎編 岩波文庫
海神別荘 岩波文庫
化の鳥・三尺角 岩波文庫
高野聖・眉かくしの霊 岩波文庫
泉鏡花 群像日本の作家5 小学館
泉鏡花 新潮日本文学アルバム 新潮社
物語 明治文壇外史 巖谷大四
江戸東京怪談文学散歩 東雅夫著
鏡花幻想譚 四 河出書房新社
鏡花とすずの日々 河出書房
鏡花先生のこと 青空文庫
意匠の天才小村雪岱 原田治 平田雅樹 山下裕二ほか とんぼの本 新潮社
文豪たちの東京 日本近代文学館
ユリイカ 泉鏡花特集 二〇〇〇年度版 小学館
文豪どうかしている逸話集 進士素丸著 KADOKAWA
文豪の家 高橋敏夫 田村景子監修 X-Knowledge
文豪と暮らし 開発社編 創藝社
文豪聖地さんぽ 一迅社